

報告

国際交流による生涯学習と大学教育の融合の意義 ——韓国珍島の伝統文化を生かしたソウル大学の取組から何を学ぶか——

大橋 眞 佐藤高則 齊藤隆仁
徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス 研究部

要約: 韓国全羅道の離島である珍島において、ソウル大学全京秀教授が中心となって設立された珍島学会の主催により 2011 International Academic Conference 及びそれに関連した体験型授業が行われた。日本からは、徳島大学の取り組み「地域社会人を活用した教養教育」から発展した全国社会人ネットワークより、ホイスコーレ札幌、筑波大学学生が参加した。ソウル大学、木浦大学、鹿児島大学の学生や教員と共に、諸島における伝統文化とそれを大学教育・研究にどのように活用するのかについて、国際会議「珍島学会」及び実地見学会などを通じて話し合われた。地域社会人の生涯学習と大学教育を一体化すると共に、日常的な伝統文化活動をお互いに披露することと、お互いの文化について対話をするという国際交流により、それぞれの文化について学び合う場が形成された。このような活動は、教養教育の意義を学ぶために貢献するだけでなく、生涯学習と大学の教養教育の融合がお互いの長所を生かすことに繋がっていくことが期待される。

(キーワード: 国際交流、生涯学習、大学教育、韓国)

The outcome from the combination of lifelong learning and higher education in cross-cultural communications —What we could learn from the effort of Seoul National University based on the traditional culture in Chindo, Korea—

Makoto OHASHI Takanori SATOH Takahito SAITO
Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

(Key words: cross cultural communications, lifelong learning, university education, Korea)

1. 背景

既に超高齢社会を迎えた日本では、社会教育基盤の充実のために生涯学習の充実が課題となっている。また、少子化により 18 歳人口が漸減しつつあり、ユニバーサル化する大学にふさわしい教育改革が求められている。さらにグローバル化する世界の流れの中で、しっかりとした国際感覚を身につけさせるような大学教育の必要性が高まっている¹⁾。これらの3つの課題を解決するためには、それぞれの課題別に対策を立てることも考えられるが、幾つかのプログラムを組み合わせることにより、複数の課題を解決する方策を考える方が、より効果的な場合もあり得る。その中で、教育に関する重要な観点に対する気づきから、さらなる改良プログラムに対する発想が生まれることもあり得る。このように複数の課題が存在する場合には、それぞれ単独に解決策を考えるよりも、より総合的な観点からの課題解決方法の探索につなが

ることが期待されよう。大学教育の学士課程構築において、教養教育の重要性が改めて指摘されている¹⁾が、その実施方法や内容についても検討する必要性に迫られている。多様な視点から物事を見る事が出来るように視野を広げることが、教養教育の重要な目的であろう。学際的な視点から判断することができるようになるためには、多様な価値観や経験を持った人々とのコミュニケーションが大きな役割を果たすと考えられる。大学におけるクラス内でのコミュニケーションは、学生の価値観が多様である上に基礎知識の不足などの問題もあり、議論の方向性や動機付けに限界がある。そのために、2008年文科省採択の質の高い大学教育改革プログラム「地域社会人を活用した教養教育」では、地域社会人が大学の教室において、学生、教員と共に「学びのコミュニティ」を形成して、出来る限り多様な価値観を持った人達がお互いにコミュニケーションが出来るような場面設定

をすることを旨とした教育改革の取り組みである²⁻⁵⁾。また、この取組の発展系として、教室内での学びのコミュニティの構成要員として地域社会人だけではなく、海外からの留学生やインターネットのビデオ会議システムを利用した海外の大学生との会話などを採り入れていった⁶⁾。さらに、海外の大学の学生や教員とのコミュニケーションを主体としたイベント開催などのように、異文化交流をしながらお互いに学び合いが行われるような場を設定して、経験的に学べるようなプログラムを整備することは、学び合うという行為が国際交流の場でも重要であること示唆している^{7,8)}。このような国際交流の中でも、とりわけ地域社会に残る伝統文化を生かした取組は、自分たちの文化について、その起源にさかのぼって考え直すきっかけになるために、交流の意義も大きくなる。今回の取組は、ソウル大学の全京秀教授がこれまで取り組んでこられた韓国珍島の伝統文化を生かしながら、地域活性化を目指した国際交流であり、その場に参加することで、様々な学びのきっかけを生み出す仕掛けになっている。本稿では、今年度の取組の概略とその成果について考察する。

2. 取組について

2011年11月24日に珍島学会が主催するInternational Academic Conferenceが開催された。今回のメインテーマは、諸島文化とそれを生かした地域活性化である。韓国珍島ソコ湾地区の歴史と経済に関する基調講演のあと、日本や中国の事例に関する報告があった。日本において諸島文化を積極的に大学教育に採り入れている例として、鹿児島大学の大学院実習において、与論島や硫黄島に船で渡り、地域の有識者から講義を受ける形式の授業を開講しているという報告があった(図1、表1)。また、学会の前後に珍島の歴史的舞台や古民家の見学ツアーが行われた。

今回の取り組みに参加した大学は、ソウル大学を始めとして、木浦大学、徳島大学、鹿児島大学、筑波大学などであり、東海大学札幌学舎で開講されているホイスコーレ札幌からも、教職員と社会人学生の参加があった。また、多くの地域の社会

人が学会運営に携わる形で、地域と一体となった形の学会として開催された。

3. 結果と考察

3.1. 珍島学会の舞台

珍島は、珍島大橋の開通により、韓半島と結ばれて交通は便利になったものの、人口減少が続いている。このような厳しい情勢の中で、地域社会の絆を守っていくのは容易な事では無い。地域社会の伝統文化を生かす形で、地域への観光客を増やす試みは、地域社会の知名度を上げると共に、地域社会に新たな雇用を生み出し、地域社会のアイデンティティを持たせることに貢献していると思われる。また、このような珍島の試みは、地域社会の中に残る歴史遺産の新たな発掘にも貢献している。

歴史的に見ても、珍島は韓国の中でも極めて特色のある地域である。豊臣秀吉の韓国出兵の時には、先陣を務めた今治藩の水軍が、韓国側の水軍により敗北した場所でもある。水軍同士が戦った場所は、現在珍島大橋が架かっている橋のたもとであり、現在は整備された展望台になっている。狭い海峡となっているために、渦潮を身近に望むことが出来る絶景地になっている。水死した今治の水兵は、宿敵であるはずの珍島の地域住民によって手厚く葬られたという言い伝えが近隣の村に残っていた。その言い伝えに基づく発掘調査により、墓地が特定された。現在は墓地が修復整備されている。後世に残すための石碑も建てられており、今治市から慰問団も訪れたことがあるという。韓国では、豊臣秀吉は国家にとって悪名高い侵略者としての記録があちこちに見られるが、ここでは同時代における人と人との繋がりから日韓友好の証として当時を振り返る場所となっている。今回は、日本から参加したグループと、ソウル大学から参加した学生が共に学ぶ場として、この歴史的な場所が役立つことになった(図2)。

3.2. 大学の授業改善への取組

徳島大学の全学共通教育において、この場面をモデルとして、日本で紹介されている英雄として



図1 2011 International Academic Conference (Academic Society of Jindo Studies)

- A : 全京秀教授の講演
- B : 鹿児島大学野田教授の講演 (硫黄島体験授業のスケジュール)
- C : International Academic Conference の参加者
- D : ホイスコーレ札幌の生越代表 (左) と珍島の地域社会人



図2 珍島における日韓の歴史的舞台

- A : 珍島大橋の下にある豊臣時代の今治水軍と韓国水軍の戦場跡
- B : 珍島の住民により葬られた今治水軍兵士の墓の前の記念碑
- C : 今治水軍兵士の墓
- D : 韓国水軍兵士の墓

表1 2011 International Academic Conference (Academic Society of Jindo Studies) のスケジュール

1st Session-History and Economy of Sopo Bay
2nd Session-Case studies on Revitalization of Village Tradition in Japan and China
3rd Session-Revitalization of Tradition and Culture of Insular Village in Japan, China and Korea.

の豊臣秀吉と、韓国で取り扱われている見方の違いから、英雄をテーマにしての討論形式の授業をおこなった。歴史的な英雄とは、常に一つの方向から見た呼称であり、もうひとつの方向から見た時には、残虐な面があることを考え直すきっかけになった。また、殺人と死刑制度、裁判の役割など、その後続く連続したテーマをとり扱うことに繋がっていった。また、客観的な判断に必要な論理的な考え方や、判断の曖昧さについての考察へと発展していった。この様にして、視野を広げることの必要性を感じさせることや、教養を学ぶ意義を考える授業の素材として、珍島の体験を生かすことが出来た。教養を深めるための授業は、学士課程構築の中でも最も取り扱いが難しいものの一つである。海外での体験は、あるテーマについて歴史的に別の視点から考え直すきっかけになる。このようなテーマを取りあげることから議論を始めて、これと類似したテーマについて歴史的に別の観点で見ることから議論をするということに発展させて行くことが可能となる。科学の発展は、学問を細分化していき、専門分野以外の別の観点から物事を見て議論をするという機会を失わせることになった。そのために、教養教育の必要性が高まっており、より広い視野の育成が課題となっている。海外での体験学習は、新たな視点か

ら物事を考え直すきっかけとして、教養教育の改善に役立つと思われる (図3)。

3.3. 地域社会と伝統文化

今回の取組では、韓国の伝統文化をどのようにして次世代に伝えるかということが一つのテーマになっていたと考えられる。とりわけ、先祖の繋がりを表現した踊りや歌がどのようにして伝統文化の中に息づいているのかを考えさせるための場の設定が巧みになされていた点は注目に値する (図4)。これらの文化が存在すること自身が、その地域のアイデンティティを明確な形で示していると考えられる。その地域の文化の意味するところを構成員が共有することと、それを次世代に伝える場が儀式として地域社会に根ざしてきた。ところが、最近の地域社会では、世代間の意識の隔たりが大きくなってきており、このような伝統文化を継承する場としての儀式が、世代間の交流の場としての機能を失いつつある。そのために、アカデミックな儀式としての学会という場において、地域社会の伝統文化を世代を超えて共有するという形を模索する試みという面をおこなうことが、今回の取組の目的であると考えられる事も出来よう。

このような世代を超えて継承するべき伝統文化に関して、日本の地域社会においても同様であり、



図3 珍島の歴史と人の交流を生かした体験プログラム

- A : 高麗時代の瓦が散乱する遺跡での体験授業 B : ソウル大学の学生との交流会
C : ソウル大学とホイスコーレ札幌の交流 D : 珍島の村での体験授業

珍島と類似する文化を様々な地域で見ることが出来る。しかし、その伝統文化の意義に関して歴史的に顧みることが少なくなっている。そのため、世代を超えて継承することに関して、継続性に懸念が持たれている地域社会の伝統文化も多数存在する。このような問題を解決するためには、地域社会の伝統文化の歴史的な意義を明らかにして、その地域社会内だけではなく、周辺の地域文化との共通した取組として、その文化の意義を共有する場を設ける必要がある。

3.4. 大学教育と生涯学習の融合

大学教育の中でも教養教育は、学士課程構築の中でどのような位置づけをするべきかについて、様々な模索が続いている。専門教育については、教員自身の研究分野との関連において位置づけを行いやすいという面があるが、教養教育に関しては、教員の専門分野と同じであったとしても、その内容や取り扱いに関しては、様々な工夫が必要になると思われる。今回の取組のような伝統文化を取りあげて、世代を超えた知の継承を考える場として教養教育を位置付ける事により、その目的の明確化を図ることが出来る。教養教育に関して、世代を超えて受け継がれるべき知の継承という意義があると考えられる。その観点に立てば、今回の取組は体験を通しての知の継承の意義を考

える場を世代を超えて共有しながら、構成員自身が考えることが課題となっている。とりわけ、人と人との繋がりを祖先と辿っていく過程において必然的に思い起こさせるような場面設定がなされている点が注目に値する。韓国においても、日本と同様に地域社会の過疎化が深刻な問題になってきている。地域社会に世代を超えた知の継承を行うような仕組みを整備することが急務の課題となっている。生涯学習社会の構築を進めることが、このような知の継承をする上で不可欠であると考えられる。共通の課題を抱える地域社会同士の連携が必要であろう。

3.5. 国際交流と大学教育

グローバル化する世界の中で、とりわけ大学教育における国際化は重要な課題と考えられる。とりわけ、近隣諸国との関係は様々な面から取組を進めて行く必要があると考えられる。しかしながら、日本と韓国についてみると、これまでの長い歴史の中で両国は深い関係にあったにも関わらず、大学間交流に関して両国の関係は、必ずしも十分とは言えない面があった。とりわけ歴史的な面をとりあげての交流は政治的な面も関連して難しい面があった。今回の取組は、近代国家から見た両国間の関係という面を排して、民族としての観点から、祖先との繋がりについて体験を通して考え



図4 珍島の伝統文化

A : 珍島ソポリ村のステージにおける公演 B : 珍島の伝統舞踊 C : 珍島の伝統民謡 D : 伽耶琴の演奏

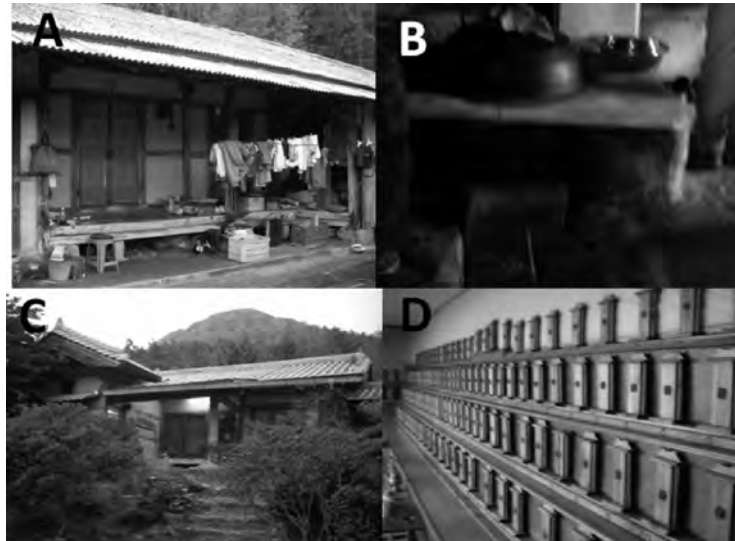


図5 珍島ソポリ村近郊の古民家

- A：伊藤巫人氏も珍島研究のために滞在したことがある民家
B：伝統的なかまどからの煙突を使ったオンドル
C：海岸沿いにある珍島の民家 D：先祖代々の位牌を安置した家屋

させるという場面設定になっている(図5)。そのために、近代国家になってからの問題を避けて通ることが出来ることから、これまで考えられてきた障壁を乗り越えての交流が可能になったと考えられる。このような民族学的な視野にたったの国際交流は、近代国家の位置付けを思い起こさせるとともに、民族としての繋がりを再認識させることにも繋がっていると考えられる。

4. おわりに

今回の珍島学会は 2011International Academic Conference として開催された。ソウル大学の取組が、地域社会に残る伝統文化を生かす形で、地域社会の活性化に貢献しうることを明らかにすることが出来たと考えられる。韓国と日本との関係は、諸島を介して海の道を通じて交流が続いてきた。そのために珍島においては、韓半島よりも地域文化が色濃く残っており、日本の沖縄諸島、奄美諸島との関連性を示唆する面がある。諸島文化をこのように歴史的に見た文化交流の場として位置付ける事により、体験学習の場としての意義がさらに深まっていくことが期待されよう。今後は、日本においてもこのような諸島文化を考え直す取組が必要であると考えられる。

謝辞

今回の取り組みで終始お世話をしていただいた、ソウル大学の全京秀教授、金助教を始め学生の皆様、及び珍島の社会人の方々に感謝する。また、今回の取り組みに徳島大学との連携として参加していただいたホイスコーレ札幌の生越代表と社会人学生の皆様方、及び筑波大学の社会人学生の皆様に感謝します。また、木浦大学、鹿児島大学の教員にも、様々な点においてお世話いただいた。この場を借りてお礼申しあげたい。

参考文献

- 1) 文部科学省：中央教育審議会答申，新しい時代における教養教育のありかたについて，2002
- 2) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・Steve T. Fukuda・齊藤隆仁・菊池 淳・香川順子・廣渡修一：大学教育改革と教養教育——地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて，大学教育研究ジャーナル，6，58-69，2009
- 3) 光永雅子・中恵真理子・齊藤隆仁・的場一将・大橋 眞：自主的な学びを目指す「学びのコミュニティ」活動——学生・社会人・教員で創る生涯学習の形，大学教育研究ジャーナル，7，102-109，2010

- 4) 光永雅子・大橋 眞・佐藤高則・齊藤隆仁：グローバル化時代に即した環境教育プログラム開発を目的とした体験型異文化交流，大学教育研究ジャーナル，8，91-100，2011
- 5) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齊藤隆仁・廣渡修一：大学教育ボランティアを活用した教養教育——地域に知の循環型社会の構築を目指す新しい形の生涯学習，日本生涯教育学会年報，31，83-96，2010
- 6) 鄭 愛軍・大橋 眞：実例による異文化コミュニケーションの問題分析——青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に，大学教育研究ジャーナル，8，69-75，2011
- 7) 大橋 眞・光永雅子・中恵真理子・Steve T. Fukuda・齊藤隆仁：高等教育と生涯教育を考える International Conference——地域社会人を活用した教養教育の一環としての日韓中交流，大学教育研究ジャーナル，7，78-84，2010
- 8) 大橋 眞・光永雅子・佐藤高則・齊藤隆仁：日本とモンゴルの大学教育改革を考える国際会議「International Conference on Global Trends in Educational Culture」の成果と課題，大学教育研究ジャーナル，8，82-90，2011